
テク×2（テクテク）

沢崎翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テク×2（テクテク）

【NZコード】

N6115Y

【作者名】

沢崎翔

【あらすじ】

24時間で100kmを歩くイベント（通称100ハイ）を通して様々なことを感じ、成長する3人の大学生の青春群像劇です。

主人公？：中井雄浩

恋に奥手な大学3年生。しかし100ハイでは、同じ部活の後輩である青木奏と一緒に、2人きりで歩くことになる。

主人公？：深谷春美

しつかり者の大学4年生。今回の100ハイは歩かず、サポート役に徹する。100ハイをきっかけにペアだつた男の先輩と付き合うようになるが、その後別れてしまつたため、100ハイに苦い思いを抱いている。

主人公？・まつやまさとる松山哲

お調子者の大学2年生。1年生の時に参加した100ハイでは完歩できなかつたため、今年の100ハイに懸ける思いは強い。

1歩目・100ハイ×ベーゴマ

24時間以内に100kmを歩いたことのある人が、一体どれほどいるだろう。

…まあ、僕はあるけど。それも、2回。

100kmっていうと、マラソン2回分よりも長い。東京から熱海まで行けてしまうほどの距離だ。

それだけの距離を歩くものだから、ゴール付近になると、もう、一歩踏み出すたびに足の骨が粉々に碎けるような激痛に襲われることなんか当たり前。

ゴールした後だつて、その場で着の身着のまま眠り込んでしまう人や、痛そうな顔をしながら足にできたマメを潰す人もザラにいる。休憩所に広がるその光景は、まさに戦場の野営病院を彷彿させるほど凄惨なものだ。

それだけのダメージを体に与えるほど過酷なイベントだから、当然然後遺症もひどい。

完歩から一週間以上経つても杖なしでは歩けない人や、中には足を疲労骨折してしまう人もいる。

幸い僕はそこまでひどい後遺症に悩まされたことはないんだけど、たまに長時間立ち続けていたりすると、左足首の外側が痛くなってしまうことがある。たぶんそれも、後遺症の一つだと思つ。

じゃあ、一体何のために？

完歩したら100万円がもらえるとか、テレビで取り上げられて有名人と会えるなんていうおしゃれ要素なんか一切ないのに。

そんなに辛い思いをしてまで、一体僕は、何のために100kmも歩くのだろう？

…わかんない。何でだろう？

いや、特に深い理由なんかないんだよ、きっと。

だって、嫌だらうがなんだらうが、歩かなくちゃいけないんだもん。

それが、100kmハイク。

都のボーカウト連盟が毎年11月に開催している、かなり狂ったイベントだ。

だって24時間で100kmも歩くんだよ？もちろん、寝ないで。

「狂歩」と書いて、「100ハイ」と読みます。…なんてね。

さて、少し話が脱線してしまったけど、そもそもそんな面倒くさくて辛いイベントに、何で僕は参加しなくちゃいけないのか？

実はそれは、僕が大学で入っている部活と関係がある。

それが、ローバークルー部。

ちょっと変わった名前の部活だけど、要するに「ローバークルー」つていうのは、ボーカリストの大学生バージョンだと思ってくれたらい。

そんな聞き慣れない名前の部活に興味本位でなんとなく入ってしまったのが、運の尽きだつた。

実はこの部活、都のボーカリスト連盟に加盟している。

だから当然、連盟が主催する100kmハイクには、加盟団体の一員として参加しなくちゃいけないのだ。

ああ、2年前、かわいい女の先輩たちに唆されて入部届にはんこを押してしまった自分を殴り飛ばしてやりたい！

…まあ、今さらそんなこと言つたって仕方がないんだけど。

とにかく、早くこのアンケートを埋めなきや。

そう、申し遅れましたが僕こと中井雄浩は今、今年で3回目を迎える100kmハイク 通称100ハイに関するアンケート用紙を前に、もう1時間近くも無駄にうだうだ考え込んでしまっているのだ。

「目指せ、100ハイマジック！あなたがラブを咲かせたい人はだれ？ぜひ×2指名してちょう（も・ち・ろ・ん、「さきこ」つて書いても大歓迎だよん？）」

…イタい。イタいよ、咲恋。さきに

名前もイタいけど、この質問のテンションはもはや読むに堪えないよ。

「恋が咲く」という名前を付けられてしまつたばかりに、「わたし、今まで恋なんか咲いたことないもん!」と開き直つてみんなから憐みに満ちた失笑を誘うのを得意とするのが、僕の同期である森野咲恋もりのや　さきにという女の子だ。

そんな彼女だけど、今回の100ハイでは部活の代表者として、連盟の人たちといひやり取りをしている。

更に彼女は今回の100ハイで、誰もがつりやむ「ある権利」を握っている。

それはローバー部員なら、一度は乱用……いやいや、願わくば使わせて頂きたいなあと思つもの。

…100ハイで一緒に歩く、男女ペアを決める権利だ。

そう。100ハイは原則的に、男女2人ペアで歩く。

真夜中に入気のない田舎道を歩くこともあるから、安全上の問題のため、夜間に女の子が1人だけで歩くことが認められていないのだ。

だから女の子が歩く時は、必ず男とペアになつて、一緒に歩かなきやいけないというルールになつていて。

…これで何かが起こらないわけがないじゃないか！

実際、僕の1学年上に当たる女の先輩なんかは、2年前の100ハイが終わってからしばらく経った後、ペアを組んでいた男の先輩と別の意味で「ゴールイン」してしまった。本当にうらやましい限りだ。

生まれてこの方、女の子とデートしたことさえない僕としては、100キロを歩くだけで彼女できるんだつたら、足の1本や2本くらい、全然潰したつて構わないと思つ。

それに付き合つたのは至らないまでも、100ハイの前よりもずっと仲良くなるという男女ペアはけつひつ多い。

やはり、100キロを24時間以内に歩くとこうした極限状態の中では、普段はだらしがなくていい加減な男だってどこか頼もしげに見えるし、いつもほつるさくて小憎らしい女の子でさえ、不思議とかわいく見えてしまうものなのかも知れない。

そしてそういう数々の現象を、人は俗に「100ハイマジック」と呼ぶ。

結局、それが目当てで100ハイに参加するという人も少なくないんじゃないかと、僕は思つてゐる。

ていうか、そうでなければ僕たちは、ただ頭が狂つているだけのDM集団だ。

そんなわけで僕は今、今年の100ハイのペアを決めるかも知れないこのふざけたテンションのアンケートに、ある女の子の名前を書こうかどうか、真剣に悩んでいる。

シャーペンを置き、頬杖を突きながら窓の外の景色をぼんやり眺める。

10月の常盤松大学のキャンパスは、2週間後に迫った大学祭の準備に追われる学生たちの姿で賑わっている。

僕が今座っている所からは、お揃いのパークーを着た何人かの集団がダンスの練習をしている光景が見て取れた。

みんなしてベーハマのよつて、忙しそうにぐるぐると回り続けている。

一体あの人たちは、何が楽しくてあんなにぐるぐる回っているんだろう。

まあ、そんなことを考えたって仕方がないか。

あの人たちからすれば、僕が1ヶ月後に100kmを歩こうとしていることだって、意味がわからないことだと言い出すに決まっている。

でも、今回の100ハイは、僕にとって特別な意味を持つ。

「今年の100ハイ、一緒に歩いて下さい」

そう言つた彼女の言葉が、さつきから頭の中で何度もリフレインしている。

本気で言つたんだろうか。でも、もうかなり前の話だもんなあ。

… そりだよ、忘れていたに決まっている。

何期待していらっしゃるの？

止めたきなよ。どうせ、またイタイ思いをするだけなんだからさ。
過去のトライカムが、僕の右手にその子の名前を書いてことを躊躇される。

でも…。

もし彼女があの時の約束を覚えてくれていて、このアンケート用紙の同じ項目に、僕の名前を書いてくれていたとした…。

ため息をついてから、再びシャーペンを手に取る。

書こう。…いや、やつぱり無理。せつせつ、そんな堂々巡りの繰り返し。

本当に情けない。結局僕は、いつもいつもだ。

2回も完歩したくせに、これが恋愛となると、最初の一歩を踏み出すことができない臆病者なんだ。

はあ、君のアンケートを見る「ことができたらなあ。

…ねえ。

君は本当に、僕の名前をひらがなでに書いてくれたのかな？

奏
か
な
で
ち
ゃ
ん
。

1歩田・100ハイ×ベースボール（後書き）

はじめまして、【1歩田】を読んで頂き、ありがとうございます。
さて、物語中に登場する「100ハイ」は、実在しているイベント
です。

そしてこの話は、僕が実際に100ハイに参加した経験をもとに書
いています。

だから「足を疲労骨折するなんて、そんなバカな」と思っている方。
事実です。

ウソだと思つたら、100km歩いてみて下さい。

⋮「冗談です。

さて、この物語の主人公の1人である中井さんが100kmの道を
歩き出すのはもう少し先の話になりますが、どうかその日が来るま
で、読み続けて頂けたら嬉しいです。

2歩田・膝×クラー(前輪)

【2歩田・膝×クラー】

2歩目・豚×クラト

あおきかなで
青木奏ちゃんは僕と同じ部活で一つ下の後輩に当たる、ちよつと変わった女の子だ。

「豚を食べにきました。」数日、もやししか食べてなかつたんで「そう言つて、彼女は何の前触れもなく、ひょうひょうとした様子で現れた。

その日は地域の大学生ローバーが何人か集まつて、幼稚園くらいのボーリスカウトのこどもたちに、豚の丸焼きを振る舞うというイベントの日だつた。

常盤松大口ーバーからは役員である僕と咲恋、それに2年生の松山哲^{やまさとしる}が参加することになつていたんだけど、まさか奏ちゃんが来るなんて。

そんな話全然聞いていなかつたから、僕はすっかり面食らつてしまつた。

「ありがとう、奏ちゃん！来てくれて」

そう言つて、咲恋がはしゃいだ様子で話しかける。

「ねえ、聞いてよ、奏ちゃん。他大の子がメールでさ、『オレ、今日バイト入つてたの忘れてたわ』…お前、ふざけんなよ、ジーザス！って感じでさ。ちよつと困つてたところだつたんだよね」

「マジですか？よししゃ、豚が一人分浮いたぜ」

やう言ひて、奏ちゃんが小さくガツツポーズを取る。

ああ、この子、絶対に何か勘違いをしている。食べるだけじゃないんだよ？僕たちが焼くんだよ？豚を。ちゃんと動いてくれるのか、なんだか心配になつてきた。

やつぱり、彼女はどこか変だ。何かがみんなどすれているようしか思えない。

女の子なのに、しゃべり方などいか男っぽいし、おしゃれにも全然無頓着なようだ。

最近は暑いからつて、上はダボダボのTシャツのペペロテ。しかも今日は、よりによつて高校時代のクラスTシャツの日かよ。もつ何回見たことか。ドクロのマークが背中に描かれた、紫のクラー。

そんな格好で、平氣な顔して新宿や渋谷の街中を出歩くんだもん。恥ずかしくないのかなあ。今日だつて、他大の人たちもたくさんいるのに。

こんな感じで、化粧品を買つくりながら一週間豪勢に肉を食べ続けるつて言い切るのが、青木奏という女の子…つて、あれ？

おかしいなあ。女の子っぽい要素が、一つもないぞ？

「ねつ？見てよ、じどもたけ。たくさんいるでしょ？みんなかわいいよねー」

「えっ、IJなんにいるんですか？参ったなー、わたし、IJビも嫌いなのに」

性別不詳な奏ちゃんが頭を搔きながら面倒くわざつに言つ姿を、遠目から見つめる。

…ああ、あつた。女の子っぽい要素。

長い髪。しかも、墨をこぼしたみたいに黒くてきれいなストレートヘア。

それとコントラストを描いて際立つ、白くて透き通った肌。そしてビニが醒めた印象を抱かせる、切れ長の目。

「まあ、豚だけ食べて、さつさと帰ればいいか

がくつ。せつかく人並み外れてかわいく生まれてきたのに、中身の方はもつと人並み外れているからなあ。

彼女が普段何を考えているのか、本当によくわからない。

そんな彼女のことを「火星人」と呼んで煙に巻く人も少なくないけど、僕は嫌いじゃない。

むしろ、つりやましいとわざと思つてしまつ。

彼女は、ちゃんと自分を持つている。

常にふらふらしながら生きている、僕とは違う。

僕も彼女みたいに、堂々と自分をさらけ出すことができたらなあ。

「いや、でも、さすがにクラークを着る勇気はないな。

まあ、落ち込んでいても仕方がない。時間になつて、メガネをかけた男の人が集合をかける。どうやら、彼が今日のイベントの責任者らしい。

いくつくらいだろう、少なくとも、大学生のようには見えない。

集まつた大学生スタッフにいろいろ指示を出すんだけど、その異様に高い声が耳にまとわりついて、かなりうつとおしい。

しかも妙に馴れ馴れしいくせに、言つていることがイマイチよくわかんないし。本当に大丈夫なの、この人？

それでも、豚を焼く台座を組み立てる手際の良さは、お見事と言うしかなかつた。

難しいのに、炭に火を点けるのだけれど、3分もかからなかつた。どうやら、彼のボイスカウトとしてのスキルは、本物のようだ。

「すごいでしょー？ あの人、なつめ夏田さんって言つんだけど、ませだい間瀬田大学ローバーのOBさんで、今はプロのスカウトをやつてるんだって」

「…で？ 今はどんな仕事をしてるつて？」

「えつ？ だから、プロのボイスカウトだつてば」

「ねーよ、そんな職業！」

要するに、ただの一ートじゃん。やっぱりヤバいな、あの人。あ
あいつ大人にだけは、なりたくないな。

2歩目・豚×クラト（後書き）

ローバークルーはボーアイスカウトの大学生版といつて、いつも活動も行っていました。

他にも地域のいじどもを連れてハイキングをしたり、餅つきをしたこともあります。

3歩目・火星人×しゃくれアゴ星人

さて、順調に焼き始めた豚だけど、実はここから先が長い。

炭の遠赤効果でじっくり炙るものだから、夏田さん曰く、焼き上がるのに5時間近くもかかるそつだ。

「うわー、みんなお腹を空かせて帰っちゃうよ。僕も帰りたいけど。そうさせないために、今からおにぎりを作る班と、一組もたちと遊ぶ班に分かれるといつ。

どつちの班がいいか、手を挙げて選んで欲しいと夏田さんが説明する。

その結果、僕たち常盤松大口ーバーの4人は咲恋以外、みんなおにぎりを作る班を選んだ。みんな小さいこどもが嫌いだからだ。

ははっ、僕たち、一体何をしてここに来たんだろうね？

ええ、そうですよ。僕も松山も、じゃんけんに負けたせいでこんな雑用をさせられているのだ。

そうでもなければ、誰が貴重な休日を犠牲にしてまで好き好んでこんな所に…って、奏ちゃんはそのクチだつたか。

「中井さん。知っていますか？豚の脳みそって、中国では珍味として重宝されているんですよ」

「飯をよそいながら、奏ちゃんがそんな豆知識を披露する。なぜか彼女は、こういうマニアックな方面に異様に詳しかったりする。

「しかも『豚の脳みそスープ』っていうのがあって、写真を見たんですけど、もつそのまんま、豚の脳みそがスープの上にプカプカ浮いて……」

「きめーよ、お前、いつもそんなもの食つてんのかよ？」

「気持ちはわざわざ話す奏ちゃんの言葉を、松山がすかさず遮る。
「の2人、同じ学年なんだけど、いつも何かにつけて言い合つて
いる。

そりゃあもひ、「ケンカするほど仲がいい」なんてレベルじゃない。たぶん、本当に仲が悪いんだと思つ。

「食つてねーし、基本毎日もやしだし」

「ウソつナーお前、どうせまた貧乏の振りをして同情引くつひとつ
るだけだらうが！」

「うるわー。黙れ、しゃくれアゴ星人

「だーれがしゃくれアゴ星人だあ！」

また始まつた。みんなが見ていて、「恥ずかしいなあ、もつ。

でも松山のアゴはよく見ると、確かに少しだけしゃくれてこる。

そして文字通り、かなりしゃくに障る男だ。

とは言つても、社交的で行動力がある松山に対して、僕が一方的に妬んでいるだけだけ。

「そう。僕は松山が苦手だ。」

自分とは対極的な存在つていうのもそうだけど、何よりも僕は彼に、これ以上ない弱みを握られている。

「…あつ、思い出した」

握つたおにぎりを皿の上に置いてから、奏ちゃんがぼそりと呟く。

それにしても彼女が作ったおにぎり、野球ボールくらいの大きさなんだけど、あのこどもたちにはちよつと大きすぎるとんじやないのかなあ。

「あの牛乳瓶メガネの人、去年の100ハイでラジオ体操をやつた人だ。ですよね？ 中井さん」

「えつ、夏目さんのこと？…ああ、覚えてないけど」

「いや、間違いないです。あの人、かなり変わつてますよね。ヤバいな、わたしとキャラが被る」

「安心しろ。お前以上の変人なんかいねーから」

「『『プカ×2（プカプカ）』のアゴほどじやないよ」

「何だと、てめえ、『ハーモニコペん』言つてみろー。」

もつ、ケンカしてる暇なんかあつたら、もつと手を動かしてよ。

といふで「プカ×2」といふのは、秦ちやんが松山に付けたあだ名だ。いつもタバコを「プカプカ」ふかしているから、そう呼ぶことに決めたらしい。

表記が「プカプカ」じゃなくて「プカ×2」なのは、「記号や数字が混じっている方が火星語っぽい」という彼女のポリシーがあるから。よくわかんないけど。

こんな具合で、彼女はいろんな人の特徴をもじつては「～×2」と呼んでくる。

まあ、僕は普通に「中井さん」だけだ。要するに、それだけ無個性つてことか。「うーん…」。

それにしても、100ハイか。正直に言って、あんまりいい思い出はないなあ。

過去2回、100ハイに参加して、僕は2回とも完歩することができた。

でも、ちつとも楽しくなかつた。

100ハイのペアは役員が決めるから、必ずしも気心が知れた人と一緒に歩けるとは限らない。時には男女比の関係で、3人で歩かなきゃいけないことだってある。

そんな組に入れられた日には悲惨だ。2人だけで会話が盛り上がり、あぶれた1人は寂しく地図を読みながら歩く。

僕は過去2回とも、そんな惨めなガイド役を強いられてきた。

だから100ハイマジックなんて、夢のまた夢。

僕にとって100ハイは、ただの苦行に過ぎなかつた。

本当は僕だつて、女の子と2人きりで歩いてみたい。

いろんな話をし、いろんな景色を見て、せめてその100kmの間、だけでも、本当の恋人どうしになつたみたいに、甘い時間の中を歩いてみたい。

でも、絶対に無理だよ。

僕みたいなやつと一緒に歩いてくれる女の子なんか、いるわけがない。

いのとしたらあの子だけど、そのチャンスはもう、3ヶ月前に自らの愚行で潰してしまった。

本当に僕は、どうしようもないダメ男だ。

「…だからーあれば咲恋さんのせいだったんだってー」

まだ言こひつてこるよ。

実はこの2人、去年の100ハイではいずれも途中リタイアという結果に終わっている。だからそんなことで責め合つたって、虚しいだけだと思うんだけどなあ。

「咲恋さんが道に迷つたりするからー体力的にはまだ余裕だったのに、そのせいで足切りになつただけだつーのー」

「うわー、人のせいにするなんて、しゃくれアゴの風上にも置けないやつだな、お前は」

「いいよ、置かなくともー」

「まあ、わたしは今年こそ、絶対に完歩するけどね」

「いいや、絶対に無理だね」

強い調子で、松山が言つ。

「だつてお前、全然地図読めねーじゃん」

「いいんだよ。そんなの別に、合理的にM&A方式で補つちやえば」

M&Aなんて、奏ちゃんはまた小難しい言葉を使つ。

要するに、地図が読める人とペアを組んで、その人について歩くつていうことかな。確かに、一番合理的で楽な方法だと思う。

「そういわけ、中井さん」

えつ、どういうわけ？ いきなり話題を振られて困惑つつも、奏ちゃんの方を見る。

「豚の脳みそは譲りますから、それで一つ、わたしに買収されてくれませんか？」

「はあ、買収？」

「今年の100ハイ、一緒に歩いてトセ。中井さん、地図を読むのは得意ですよね？」

その言葉は、僕の耳に3周遅れで入ってきた。

「……うん。いいよ

「よしつ、交渉成立」

短く言つてから、彼女は再びおにぎり作りに精を出し始めた。

心なしか、野球ボールサイズだつたはずのおにぎりが、砲丸サイズまで大きくなつてゐるような気がする。

そんな彼女の様子を、僕はおにぎりを握ることも忘れながら、しばらく呆然と見つめるしかなかつた。

今僕、100ハイに誘われた？

女の子から、サシで…？

そんなこと、もちろん今まで一度もなかつた。

どうせ今年も適当な人と組まされて、ガイド役をさせられるものだとばかり思つていた。

僕と2人きりで歩いてくれる女の子なんか、いないとばかり思つていた。

それなのに、こんな僕でも、「必要だ」と書いてくれる女の子がいるなんて。

100ハイマジック、か。

「みんなーーおにぎり足りないよーーほり、もっと頑張つてーー」

部屋に入つてくるなり、夏田さんが僕たちおにぎり班を急き立てる。

「中井くんも、作ったおにぎりを置いて」

夏田さんと言われるがまま、ぼんやりしながら三角形になり損ねたおにぎりを銀皿の上に置く。

… こんな僕だけだ。

100ハイなんか、苦行でしかなって思つてた僕だけだ。

今回ばかりは、ちよつとくらいい、夢を見たつていいくね？

4歩田・並行×夢（後書き）

以上、中井さんと奏が100ハイで一緒に歩く約束をするペルソナでした。

100ハイでずっと寂しい思いをしてきた中井さんにとって、奏の誘いは夢みたいにうれしいことなんですね。

次回より、10円の話に戻ります。

5歩目・書く×書かない

窓の外には、相も変わらずぐるぐる回り続けるベーゴマ集団の姿が見受けられる。

すごいなあ。まあ回すだけなら、僕だって負けてないけど。持っていたシャーペンを机の上に放り投げ、うつ伏せになる。

書く。書かない。

もう一時間以上も、そんな不毛な悩みを頭の中でぐるぐる回し続けている。

何でだよ？ちゃんと約束したじゃないか。もつと自信を持つよ！

そう思つて右手に力を入れるたびに、「もし、彼女があの時の約束を忘れていたら…」という不安が、僕の右手に繋がるあらゆる神経を切り裂き、動かなくしてしまうのだ。

そう。僕はひたすら、そのことだけを恐れていた。

あの日以降、本当は何度も本人に確認しようと思ったんだ。

「あの時言つたことは本気なの？」「本当に、一緒に歩いてくれるの？」って。

でも、訊けなかつた。

そんなことを訊いて、「えつ、何の話ですか？」なんて言われる

ことを想像しただけでもう、1人で勝手に舞い上がっていた自分が恥ずかし過ぎて、頭がおかしくなってしまいそうだった。

だつて、冷静に考えてみてよ。

彼女は別に、僕と歩きたいわけじゃない。

地図を読める人だつたら、誰でもいいんだ。

あの時彼女が僕を誘ってくれたのは、100ハイの話題になつて、たまたまそこに、地図を読める僕がいたから。

そうだよ。そんなにつましい話なんか、あるわけないじゃないか。

4限の終わりを告げるチャイムが鳴る。

そろそろこのロビーも、教室から出て行く人たちの群れであふれ返つてくるだろう。そこに飲み込まれるのは、なんとなく嫌だ。その前に、帰っちゃえ。

アンケートの締め切りは今田中だけど、もうビリードもいいや。

そもそも、この項目に特定の人物名を書く人なんか、まずいないつて。恥ずかしいもん。空欄のまま、さつさと提出しちゃおうつと。

「…つて。僕は一体、どこまでヘタれなんだよ」

「うん、そうだね」

いや、そこは少しぐらつコローラしてくれても…つて、あれ?

何で独り言に対して、返事が返つて来るの？

はつとして声がした方に顔を上げる。

その瞬間、僕はまた顔を伏せたくなるような残念な気分に思わずなっちゃつたんだけど、それはさすがに失礼だと思ったから、何とか持ち堪えた。

「何してんの？咲…」

「あーー！これ、100ハイのアンケートじゃん！」

そう言つて咲恋が、僕の目の前に置いてあつたアンケート用紙をぱつと取り上げる。

しまつた、油断していた！

慌てて取り返そうとするけど、咲恋は器用に体をくねらせてそれを許さない。くそつ、丸つこい体のくせに、意外と素早い。

「…何よー、中井さん、肝心なところがまだ書いてないじゃん。締め切りは今日なんだよ？早くしてもらわないと、困りますなあ」

例の空欄を指しながら、咲恋がふくれつ面で文句を言つ。

「うぜー、じいっ、今授業が終わつたところか。

何で運が悪いんだ。よりによつて、アンケートを作つた張本人に捕まつてしまふなんて。

「…別に。空欄でいいんだよ、そりは」

咲恋から田を逸りしながら、ぶつ ~~せり~~めりに言つ。

「全然よくなじよ。ペアを決める立場としては、この欄が一番重要なんだからぞー」

そう言いながら、咲恋が隣のイスにさつと腰掛ける。

「ねえ、誰と一緒に歩きたこのた? やつぱり、1年生?」

「いや僕、1年生の女の子と、あんまり話したことないし…」

「何を? そんなこと書いたら、2年生の女の子とだつてあまり話せてないじゃん」

「グサッ…」ここ、オブリークという言葉を知らないのだらうか。いや、知るわけがないか、咲恋だもんね。

でも確かに、男子高出身のせいか、僕は女の子に対して全くと言つていいほど免疫がない。

咲恋みたいな同期の女の子にはだいぶ慣れたけど、先輩や後輩となると、からきしダメだ。

「ていうか、本当に誰でもいいんだって…」つせ僕みたいな男に、選ぶ権利なんかないわけだし。それに、どうせみんな何も書いていないんでしょ? いるわけがないじゃん。こんな所に、特定の人の名前を書くなんて…」

「いのよー、何人かは。まつちゃんとか、奏ちゃんとか」

「えつ、奏ちゃんが!」

「言つてから「しまつた!」と思つたけど、もう遅かつた。

「…なるせー、中井さん。やつこつ」とですか

僕の肩をポンポンと叩きながら、咲恋がそう言つて満面の笑みを見せる。

面倒くせー、こいつた類の話になると、咲恋はいつも増してうざくなる。

「やつか、奏ちゃんがいいのか。うーん、でもなー。彼女の気持ちもあるしなあ…」

そう言つて頬杖をつきながら悩み始める咲恋だけど、どうせレンコンみたいにすかすかな頭なんだ、何を考えたつて結論なんか出でるわけがない。

それにしても、咲恋の反応…。

アンケートの作成者だから、咲恋は当然、みんなから集めたアンケートを見ているはずだ。

もちろん、奏ちゃんのも。

その咲恋が見せる、この反応。

「…誰なの？奏ちゃんが書いた人の名前って

そう呟く声が、思わず震える。

「知ってるんでしょ？教えてよ」

やつぱり奏ちゃんは、僕の名前を書いてくれなかつたみたいだ。

しかも、「彼女の気持ちもある」って……。

それで要するに、他の人の名前が書かれていたってこと？

だとしたら、僕は完全にピートロじゃないか。ははっ、やつぱつ」
うなるわけか。

早まらなくてよかつた。今年も、つまらない100ハイになりそうだ。

「いやー、さすがにそれは、プライバシーの保護と言いますか…」

「ぶつちやけるねー、中井さん」

「だから、早く教えて」

「まあ、セーリーでも捕うんだつたら、教えてあげてもいいけど…」

そう言いつつも、咲恋の様子はどこか煮え切らない。

「うーん、でもなあ。 言つても、あんまり意味ないと思つよ?」

「いいから、早く教えてよ」

イライラしながら、咲恋を急かす。

もちろん、僕がそんなことを知ったところでは、今さらどうしようもないというのをわかっている。

でも、そうでもしないと、とてもじゃないけどこのもやもやした気持ちに整理をつけられそうになー。

「じゃあ、言つよー」

ふて腐れたような顔をしながら、咲恋が言つ。

思つた通り、ローバーがだんだん騒がしくなつてきた。

聞き逃さないよう、咲恋の方に耳を向けながら、息を飲むようにして次の言葉を待つ。

「…『テク×2（テクテク）』」

「…はい？」

「だから、『テク×2』。それが、奏ちゃんがこの空欄に書いた人の名前だよ」

そう言って、咲恋が口を尖らせた。…いやいや、ちょっと待つて。

何だよ、「テク×2」つて。

彼女の火星語でそんな風に呼ばれる人、今のローバーにいたつけ？

「誰だよ、『テク×2』つて？」

「知らないーい。だから言つたじやん、『言つても意味ないよ』つて「でもそう書いてあるつてことは、ローバーの中に『テク×2』つて呼ばれてる人がいて、奏ちゃんはその人と一緒に歩きたいつてことだらう?」

「そりだらうけどさー。でも、仕方ないじやん。わたし『テク×2』つて誰のことを言つてるのか、さっぱりわかんないもん。ぶっちゃけ、すこし困つてんだよねー。あの子、一体誰と組ませて欲しいんだらう?」

お手上げといった様子で、咲恋が首を傾げる。

やつぱり、咲恋も知らないのか。となると、現時点で「テク×2」と呼ばれている人はいないと考えてよさそうだ。

だとしたら「テク×2」は、まだ火星語で呼ばれていない人のうちの誰かつてこと?

「まあ100ハイのペアだから、女の子つてことはないよねー」

「あと、既に火星語の名前が付けられている男も、候補から外れるよね」

「なるほどー。だつたらもう、中井さんでいいか」

「ちょい、何でそつなる?」

「いいじゃん。中井さん、まだ火星語の名前がないんでしょう?」

「まあ、そりだけど…」

「だったら、なつちやえよ、ユー。彼女が望む、『テク×2』さん
つてやつこそ!」

「えつ? 僕が…」

「テク×2」に…なる?

それは考えもしない発想だった。でも、じつこいつとは考えられないだろうか。

もしかしたら奏ちゃんは、特定の人物を意識して「テク×2」と書いたわけじゃないかも知れない。

今回、一緒に100kmを歩く相手に、「テク×2」になつて欲しいんじゃないだろうか。

だったら、僕が「テク×2」になつてしまえばいい。

それはなんだか、僕が彼女にとつて、特別な人間になることのようと思えた。

「まあ、奏ちゃんのことだから、適当に書いただけっていう可能性
もなきにしもあらずって感じだけど…」

腑に落ちない様子で呟く咲恋の隣で、僕はすっかり舞い上がっていた。

僕が「テク×2」になるひことばイ「ホール、奏ちゃんの彼氏になるひことでいいのかな? いいな、それ。

奏ちゃんはちょっと変わっている子だけど、その辺の女の子よりは桁違いにかわいいし、付き合ひことになつたら、すぐ楽しそうだ。

「咲恋。『テク×2』つて、一体どうこう人のことを言つてるんだるひね?」

「知らないよー。それくらい、自分で考えなさい。まあ『ラブの宿題』つてやつ? いいなー、ひらやましこ

そう言つて、咲恋が立ち上がる。

「じゃあ、わたしそろそろ行くね。頑張るんだよ、中井さん。ぶつちやけわたし、ずっと心配してたんだから。だつて中井さん、しちゃんとあんなことになつてから、ずっと…」

「…咲恋!」

自分でもびっくりするくらいの大声が、突然口から飛び出した。

でもそつなつてしまひませ、しーちゃん 大山紫穂ちゃんの名前は、僕にとつて耳に痛すぎる名前だ。

「…その話はもう、忘れないんだよ」

やつとの思いで言葉を吐き出す。

そうか、あれからまだ、半年しか経っていないんだよな。

バカだなあ、僕は。また同じ失敗を繰り返そうとしていたなんて。しーちゃんをあんな目に遭わせてしまった時、身が焼けるほど後悔したばかりじゃないか！

僕みたいな男が誰かを好きになるなんて、それはもう犯罪行為に等しいんだ。

だからもう、誰かを好きになるのは止めようって。

「忘れるなんて、そんなのズルす、さるよ」

呆れた風に言い捨ててから、咲恋は講義棟の外に出て行った。ふと外を見ると、例のベーゴマ集団も練習を止めて、そそくさと帰る準備を始めていた。

そんな中で僕だけが、永久に抜け出せない迷路の中を、ただ闇雲に、ぐるぐるぐるぐる、回り続けている。

8歩目・レンタカー×虫

後輩たちが100ハイマジックの話を訊いてくるたびに、わたしは笑顔で「そんなものはないよ」と答えている。

まるで、2年前の自分を笑い飛ばすかのよつて。

わたしたちは決して、ドラマの中のヒロインじゃない。

非日常で芽生えた恋愛感情を、そつくりそのまま日常に持ち込むと思つたら、絶対に痛い目に遭う。

しょせんマジックは、いつか消えてなくなってしまうものだから。

「レンタカーって、こんなにするんだ…」

家のパソコンの前に座りながら、ため息をつく。

8人乗りだと、24時間で1・5万円から2万円。これにガソリン代と駐車場代、更に差し入れ代まで加えたら、3万円はかかってしまう。8人で負担するとしても、1人4000円は覚悟しないと。

うわー、痛い出費だ。5人乗りに変えようか？

でも、大量のリタイア者が出了た時のことを考えるとなあ。

5人乗りだと、一度に全員運びきれないかも知れない。

…よしつ、決めた！やつぱり8人乗りにしよう。

こんなところでケチつちゃダメ。なにせ今年の100ハイは、かなり過酷な田舎道を歩くんだ。

ちゃんとした車を借りて、万全の体制でみんなをサポートしてあげなくちゃ。

8人乗りのワゴン車を選択してから、予約フォームの氏名欄に「**深谷春美**」と打ち込む。
ふかやはるみ

それにしても、レンタカーの予約くらい、自分でやつなさいよと
言いたい。

面倒なことは、全部わたしに押し付けるんだから、
航大のやつ。

でも、仕方がない。運転手はあいつしかいないわけだし。

下手に怒らせて、へそを曲げられてしまっては困る。

ていうかそもそも、当日応援に行ける4年が、わたしと航大しかいないのは何で？

みんな就活だ研究室だつて、言い訳ばかりして。

4年がサポートに回つてあげなきゃ、参加者の応援やリタイア者のケアをする人が、誰もいなくなつちやうじやない。

予約フォームの欄を全て埋めたのを確認してから、送信ボタンを押す。

よしひ、これで一つ、仕事が片付いた。はあ、疲れた。ベッドに飛び込み、思い切り体を伸ばす。

明日は部会。セレブリティによると、今年の100ハイのペアが発表される。

わたしは歩かないから関係ないけど、なにとなくドキドキしてしまつ。

誰と誰が一緒に歩くんだね。楽しみだな。

なにせ100ハイには、ペアの組合せの数だけ、ドラマがある。わたしもあつた。

2年前、わたしはドラマの中のヒロインだった。

少なくとも、あの100ペアの間だけは。

外から、虫の声が聞こえてくる。静かな夜。このまま寝ちゃおうか。

そう思って、パソコンの電源を切ろうと起き上がる。

「パンパン」

そんな風に鳴く虫なんかいたつけ？
いやいや、そんなのこるわけがない。普通に考えて、チャイムの

音だ。誰か来た。

…いや、ヤツが来た。来てしまった。

うわー、サイアクーこれからベッドの中でぬくぬくしようと思つていたの!」

夜の21時に、女の子の家にアポなしで来るなつて、一体何度言つたらわかるんだろ?!

「ピンポン

また鳴つた。どうする? 居留守を使う?

…いや、無理だ。窓から思いつきり明かりが漏れているし。

仕方がない。1%だけ、あいつじゃない可能性にかけて、インターネット越しに訊ねてみる。

「…どちら様?」

「オレ様だよ。早く開ける、クソガキ」

何が「オレ様」だ。また突然やつて来たりして。笑顔で死ね!

8歩目・レンタカー×虫（後書き）

100ハイにはサポートの存在が不可欠です。

サポートはコースを車で回り、チェックポイントでお菓子を配つたり、リタイア者を運んだりします。

今回からじばらくは、そんなサポート側 ハルさんのお話です。

9歩田・寄生虫×ドーナツ

これから一人暮らしを始めようと考へてゐる大学生には声を大にして言いたいんだけど、絶対に大学近くに住むべきじゃない。寄生虫のターゲットにされかねないからだ。

「おっ、うまいそなもの発見」

例えば、守屋航大もりやこうだいという名の寄生虫。

ひょろりと背が高くて無精ひげが小汚いこの虫は、人の家に來たら冷蔵庫の中を勝手に漁り出すことなんか当たり前。

過去には机の引き出しや押し入れの中まで荒らされて、もう何度も駆除しようと思つたことか。

でも、そんなことを思つてゐたのも今は昔。4年田を迎えた最近では、すっかりあきらめてしまつてゐる。

だつて、何を言つても言ひことなんか聞かないんだもん。

「おーっ。何で梅酒が置いてねーんだよー。」

「いや、むしろ何で置いてなきゃいけないの?」

冷蔵庫の中に首を突つ込んでゐる航大に、呆れた声で文句を言つ。だから、ここはあんたの行きつけの居酒屋じゃないからね。

「仕方ねーな。おい、つかせ。ちょっとパンダーに行つて買つてこい。」

「わかりました。ここに来る途中で見かけたやつですよね？」

「やつやつ。じゃあ、頼んだぞ」

「はい。行つてきます！」

「あつ、同一つこでにお菓子も買つてきてねー」

リビングから顔だけを出しながら、玄関で靴を履く司くんに声をかけたのが、1年生の齊藤由梨枝ちゃん。

「口ッとした時に見える八重歯が、ウサギみたいでかわいらしい。

ちなみに、さつき買い物に行つた石川司くんも1年生。

今日わたしの家に来たのはその2人に加えて、同じ1年生の杉山悠馬くんと岡田春海ちゃん、そして唯一の2年生である青木奏ちゃんの計6人…つて多過ぎー…

航大のやつ、どうやら部屋で暇を持て余していた子をみんなうつに連れて來たみたい。

6畳しかないリビングに6人で来られたら、狭過ぎてゆつたり足を伸ばすこともできないじゃない。

とは言つものの、かわいい後輩たちに罪はない。

せつかく遊びに來てくれたんだ、何かおいしい物でも作つてあげよつ。

そう思つて、未だに冷蔵庫の中を漁り続けている航大を蹴飛ばしてから、中にある適当な食材を取り出す。

「へー。コハル、ドーナツが苦手なんだ」

「やうなの。なんか、あの油っこいのとパサパサした感じが、どうしてもダメで…」

キッチンで手を動かしていくと、背中越しに女の子たちの会話が聞こえてくる。

ちらりと振り返つて確認すると、どうやらドーナツのおこしにお店を特集しているテレビ番組を観てこむみたい。

ちなみに「コハル」というのは岡田春海ちゃんのことで、名前が同じであるわたしと区別するために、みんなから「コハルちゃん」と呼ばれている。

それなのに、身長が148cmしかないわたしは、彼女よりも背が低い。

「うう、一体どっちが「コハル」なんだか。

それでも、彼女はわたしのことを姉のよつて慕つてくれるからかわいい。

あのくづくづした瞳で「ハルさん」なんて抱きつかれたら、男でなぐても惚れてしまいそうになる。

「えー。『ハルそれ、絶対に人生損してるよ』

「えつ、そうかな？」

「そうだって。ですよね？秦さん」

「本当だよ。毎日もやじしか食べれない」「うちの身にもなつてよ」

「出た、秦ちゃんの『なまかり貧乏日記』。フライパンを振りながら、苦笑いを浮かべる。

去年までは本気で信じていた部分もあつたけど、1泊3日で3万円もかかるスキー合宿のお金を、何の躊躇いもなく出したくらいだ。

実際そんなにお金に困つているようとは思えない。

まあ、何のために貧乏を演じててるのか、全くもつて謎だけど。

9歩田・寄生虫×データナシ（後編）

守屋航大、石川司、齊藤由梨枝、杉山悠馬、岡田春海と、一気に5人も新キャラ出してしません。

今後も出していくので、だんだん覚えてくれればと思います。

「『チコ×2（チコチコ）』さぞ。何か手伝ってましょうか？」

「ううん、大丈夫。もひどきるから」

そう言つて、炒め上がつた料理を大皿に乗せる。うふ、有り合わせの野菜とお肉で作った割には、上出来だ。

それにして、秦ちゃんのわたしの呼び方。

「小さくてかわいいから」つて理由で「チコ×2」らしいけど、背が低いことを気にしてくるわたしにとっては、なんとも言えない微妙な名前だ。

さて、完成した料理をテーブルの上に置いてから、ベッドの上に腰かける。

『くそには悪いけど、わたしたちは先に乾杯する』と言つた。

航大が買つてきたビールを、コップに注ぐ。

みんなが窮屈やつにカーペットの上に座る中、わたしだけがベッドの上で優雅にべつねぎのせ、家主の特権というものだ。

ベッドに這い上がるがゆとする航大は、もひろん笑顔で蹴落とした。

ペア発表を翌日に控えているせいか、みんな100ハイのペアに関する話題で盛り上がつてこる。

「あの人とだけは歩きたくない」とか「あの一人がペアになつたらおもしろそう」とか、本人の前では絶対に言えないことを、好き放題言い合つちやつて。

まあ、それが宅飲みならではの楽しみだけど。

「悠馬と組まされるとか、どう考えたって罰ゲームだわー」

「確かに。スタートから逆方向に歩きやうだもんな」

ただし、悠ちゃんだけは例外みたい。本人の目の前で、由梨枝ちゃんと航大がバッサリ切り捨てる。

「ずいぶんキツイことを言われているけど、別に嫌われているわけじゃないよ、たぶん。」

「気弱そうな顔をしているせいか、悠ちゃんはこんな風に、みんなからよくいじられるのだ。

「そんなことないですよ。地図は売べきです。見て下さいよ、ほら」

「そう言って、悠ちゃんがカバンから地図を取り出して見せる。

「…バカか、お前? 奥多摩を歩くのに、東京23区の地図なんか役に立つわけねーだろ」

「えつ? だつて100ハイつて、オシャレな夜の銀座を歩くんじゃ

…」

「それは去年の話だよ」

「えつ？ それじゃ、スカイタワーのすべて近くを歩いてここに来ただけだよ。」

「うーん。わざわざこんな、ドーナツ野郎」

「ちよっとね、どういひ意味ですか？」

「ドーナツみたいに頭の中がスカスカって感じです。」

「違うよ。わざわざドーナツみたいにパサパサして気持ち悪いって意味だよ」

「違うよ。悠馬は何をせつてもの点だから、『ペケ×2（ペケペケ）』なんだって」

最後の秦ちやんの意見はよくわからなにかと、何せよびよびこゝ
われよつだ。

かわこわうな悠ちやん。ソリまでくるとこじりかれてこるとこつよ
り、本当にこじめられてくるこじやなこかと、心配になつてしまつ。

「で、いつか『ハル、咲恋さんが作ったアンケートがあつたじゃん』

トイレから帰ってきた由梨枝ちゃんが、コハルちゃんに訊ねる。

「あそこ、誰か一緒に歩きたい人の名前とか、書いたりした?」

「ううん。書いてない」

「やつぱり、奏さんは?」

「うん、『やつぱり』、何も」

「オレも、書いてないや」

「あなたには訊いてないから」

厳しいなあ、由梨枝ちゃん。

しっかり者だから、どこかぼんやりしてこる悠ちゃんを相手にすると、ついつい言こ過ぎてしまつみたい。普段はそんな子じゃないんだけど。

「やつぱり、誰も書かないんだー。何だ、つまんないの

「由梨枝ちゃんは、書かなかつたの?」

ネコのクッションを抱えながら、気になつて訊ねてみる。

「書きましたよー。『3人組がいいです』って」

「なるほど。それが正解だよ」

「えつ、そういう風に書いてもよかつたんですか?」

「もちろん。別に、『男の子と2人きりで歩かなきゃいけない』なんていっルールはないわけだし」

要するに100ハイは、夜中に女の子を1人きりにさせなければ、誰と歩いてもいいってこと。

男2人の女の子1人という逆ハーレム状態で歩いたっていいし、複数のペアが集まって5、6人の集団で歩くことだってある。

その方が、会話が弾んで絶対に楽しいと思つ。

それを勘違いする下心丸見えの男子がたまにいるから、女の子は困っちゃうというわけ。

「だつたらわたしも、そう書けばよかつたなあ」

「大丈夫だよ。もし別のペアになつたとしても、合流して一緒に歩

こつよ」

「ほんと? やつたー、それなら安心」

そういうで、コハルちゃんが顔をほこりばせぬ。

「でも、もしあそこにお互いの名前を書き合っている人たちがいたら、素敵だなーって思わない？」

「ううとつした声で、由梨枝ちゃんが言ひ。

「ないですかね？そういう100ハイマジック

彼女の期待に満ちた視線に、思わず苦笑いを浮かべてしまう。

出た、100ハイマジック。… そうだよね、気になつちやうよね。
でも、すぐにわかると思つよ。」

そんなのは、一時の氣の迷いに過ぎない。吊り橋効果と一緒になんだ。

だからわたしはいつも答えを、頭の中から機械的に取り出すことにする。苦い思い出が、蘇つてくる前に。

「ないつて、そんなの。少なくとも、わたしがローバーに入つてから3年間は…」

「おーっ。ナシオのやつはどうしたんだよ？」

ただ、いつもと違つたのは、そこに航大がいたということ。

1-2歩田・気にする×気にしない

「誰ですか？ナシオつて」

「やうか、お前らは1年だから知らねーのか」

興味津々といった様子で訊いてくる女の子2人の前で、航大が下品な笑い声を出す。

「今年卒業したOBでこいつの元力になんだけビ、マジでウケるんだぜ？2年前の100ハイで…」

「ちよつと、航大！それ以上余計なことをしゃべったひ、マジで追い出す…」

「ピンポーン」

わたしが航大に掴みかかるつとした瞬間、絶妙なタイミングでチヤイムの音が鳴り響く。

どうやら、司くんが帰つて来たみたい。オートロックだから、わたくしが鍵を開けてあげないと入れないと入れないのだ。

「うわー・すげーうまそつな匂い！」

入つてくるなり、司くんが田に焼けた顔をほりほりせせる。

「ずるいじゃないですか。先に乾杯してくるなんて」

「悪いな。金はあとで払つかり」

「ねえ、『』。お菓子は？」

「ああ、買ってきたよ。みんなで食べれそうなものを、適当に」

いつも机の上に置き始めたのは、ポテチ、さきイカ、チヨコチート…。

「マジで…？」空気読み過ぎ…」

彼が最後に取り出したお菓子を見た瞬間、あまりの偶然にみんなで大笑いしてしまった。

ただし、悠ちゃんを除いて。

「『』のドーナツは、悠馬が食べなよ」

「いひ、いらないよ！あんな」と言われたばかりなのに

「あたしだつて…』のドーナツがどうしてもあなたの顔に見えて、食べる気が失せるんですけど…？…どうしてくれんのよ！あなたのせいで、もう一生、ドーナツが食べれなくなっちゃったじゃない…」

「そんな、無茶苦茶な…」

「何？みんな食べないんだつたら、わたしがもひつちやうけど」

みんなが呆気に取られる中、颯爽とドーナツの袋を開けて食べ始める奏ちゃん。

こんなグダグダな感じで、ペア発表前日の楽しい夜は更けていきましたとさ。

おかげでこれ以上、わたしと梨田紀之なしだのりゆき 通称ナシオさんとの関係を、みんなにほじくり返されるとはなかつた。

1-2歩田・氣にする×氣にしない（後輩を）

100ハイに対しても、中井ちゃんと真逆の考え方を持つハルさん。

100ハイに、相当嫌な思い出があるんでしょうね。

13歩田・ケニア×パコラ

モーリス・サトウンが死んだ。

「えつ、「誰だよ、そいつ?」だって?」

何だ、お前、オリンピックの金メダリストの名前も知らねーのかよ。仕方がねえ、教えてやる。

一言で言えばあいつは、黒い弾丸と呼べる存在だった。

当時高校で陸上をやっていたオレは、ケニアからやつてきた怪物の走りを映し出すテレビの前で釘付けになっていた。

ていうか、脚太つ。一体何を食つたら、あんな鉄パイプみたいな脚になるんだよ。やっぱり、チーターの肉か?ケニアだしな。

その後はオレも「豊島園が生んだ金メダリスト」を目指して、練習ではサトウンのランニングフォームを真似て走つてみたりもした。

だが案の定、無理がたたつて股関節を痛めちました。やっぱりダメか、チーターの肉を食わねーと。

だがそんなもの、その辺のスーパーで売つているわけがない。代わりに当時のオレが求めたものは、タバコだった。走れない 스스로は、それで「まかした。

そうしたら脚が治つた頃には、わざわざむせ返りながら走らなきゃいけない理由なんか、すっかり忘れちまつっていたんだ。

そんなサトウンが昨日、車に撥ねられて死んだといつ「コースが流れた。どんくせーなあ。陸上の金メダリストだったら、車くらいい避けるよ、全く。

「…わん…哲さん…」

ボーッとした意識の中で、ヤンヤンヤンといつた声が聞こえてくる。

「…何だよ、寝かせると、ハコヒ

「ハコヒじゃないです、コリヒです…」いつか哲さん、いい加減に起きて下せ…」

「ハコヒ…」いつか由梨枝がオレの体を掴んで無理やり起きさせよう。せつかく気持ちよく寝ていたのに。ああ、つばー。せつかく気持ちよく寝ていたのに。いつか見えた。ほんやり見える。

本当についてねえ。せつかくの100ハイなの、こんな色気のねーガキと一緒に歩かなきゃいけないなんて。

マスオさんとの3人組じゃなかつたら、開始5分でケンカしてリタイアしちまつといつだ。

「もう、本当にサイアクー。マスオさんが一緒になかつたらあたし、100ハイボイコツトするところでしたよ。」

由梨枝の声を「つ」とおじいと思いつつ、ソファからゆっくり体を起します。

そう言えば今日は、マスオさんと由梨枝の3人で100ハイの打ち合わせをするために、部室に集まつたんだつけ。面倒くせーんだよな、コース取り。

まあ、そんなの全部マスオさんに任せちまえばいいんだ。なにせマスオさんこと増尾圭さんは、今まで2年連続で完歩に成功している、知りての100ハイマスターだからな。

現に今も机の上に地図を広げながら、熱心な様子でコース取りをしてくれている。

頼りにしていますよ、マスオさん。」これで毛根の方ももう少しだけ頼りがいがあつたら、完歩きなんですけどね。

「ねえ、マスオさん。何でコハルじゃなくて、あたしが哲さんの生贊にわなきやいけないんですか?」

「何だと、誰の生贊だつて?シリヒのくせに」

「シリヒじゃないです、コリヒです!もう、本当に失礼!」

どつちがだ。全く、何でこんなやつなんかと…。

そもそもオレは、コハルけやんと歩きたかったんだ。

なにせ1年の女の子の中じゃ、ずば抜けてかわいいからな。

だから咲恋さんのアンケートにも、ちゃんとコハルちゃんの名前を書いたって言うのに！

「すまん、由梨枝。コハルちゃんを松山の魔の手から守るには、こつするしかなかつたんだ」

「ちょっと、『魔の手』ってどういう意味ですか、マスオさん！」

「いやいや、それより！ だったら、何であたしはこの人の魔の手から守ってくれないんですか！？」

「うるせえ！ 黙つてろ、ケツエ」

「ケツヒじゃないです、コリヒです！もう、いい加減お尻から離れて下さいー！」の変態！」

「まあ、待て。落ち着けって。ほら、『ース取りもだいたい決まつたから。見てみなよ』

そう言って話を強引に終わらせるマスオさんに勧められて、渋々地図を覗き込む。

まあ詳しいことはよくわからんが、あのマスオさんが決めたコースだ、今年こそ途中で道に迷うことはないだろう。もうこの際、完歩さえできれば、あとはどうでもいいわ。

13歩目：ケニア × パコラ（後書き）

3人目の主人公は、豚の丸焼き編でも出てきた松山哲。哲 × 由梨枝
× マスオの3人組で歩くようです。

14歩田・自販機×呪い

「中井。お前らのところは、まだ終わんないのか？」

中井と火星人が座っている方に向かって、マスオさんが声をかける。

「中井」つい心中の中じや呼び捨てにしているけど、一応学年はマスオさんと同じで、オレより一つ上の3年だ。

でも、「さん」付けするには値しないほどシヨボイ存在だから、直接話す時以外はたいてい呼び捨てで呼ぶことにしている。

まあ、向こうが勝手にオレのことを避けるから、直接話をする機会なんかそんなにないけどな。

「うん、あと少し。ねえ、奏ちゃん。坂がきついけど距離が短いコースと、坂はないけど距離が長いコース、どっちがいい？」

「坂がなくて、距離が短いコースがいいです」

「いや、だからないって。そんな楽なコース」

「あと、できれば自動販売機がたくさん置いてある道がいいです」

「えつ、何で？」

「お金が落ちてるからに決まってるじゃないですか」

「……」

あの2人、確か豚の丸焼きに行つた時から、一緒に歩くとか何とか言つていたな。けつ、面白くねえ。中井のくせに、紫穂の件で懲りたんじゃねーのかよ。

まあ、火星人のやつにその氣があるとは到底思えねーが、何にせよ、純粹に己の限界に挑戦すべき100ハイでそういうセツロい考えをすること自体が、オレは気に食わなかつた。

本当に好きだつたら、正々堂々と正面からぶつかりやいいだらうが。

そんな勇氣も技量もないチキン野郎が、じいじとばかりに100ハイのルールにかこつけやがつて。

これだから、童貞をこじらせたやつは嫌いなんだ。あーあ、また一波乱が起こりそうだ。マジで面倒くせえ。

もつとも、あの火星人のことだ。中井」ときにちょっとかいを出されたくらいで、紫穂みたいに部活を辞めちまつなんてことはないと思うけどな。

「あつ、『プロ×2（プロプロ）』だ」

「奏さん、じんこちははです」

ガチャリと部室の扉が開くと同時に、コハルちゃんがやつて來た。フリルのワンピースを着ていて、今日もマジでかわいい。

でも純粋過ぎるから、手を出さうって気にはあんまりなれないんだよなー、これが。きっとまだ、男とキスしたことさえないんだろうな。

「どうしたの？コハルも、100ハイの打ち合わせ？」

「うん。もうだよ」

「やつか。コハルは誰と歩くんだっけ？」

「ジョーさん。4年生の」

「マジかよ、コハルちゃん。それはツイでねーなあ」

「えつ、どうしてですか？」

「気を付けた方がいいよ。あの人、100ハイに呪われてるから」

「えーーー！？ そなんですか？」

ソファに腰かけて表情を曇らせるコハルちゃんに向かって、話を続ける。

「とにかくジョーさんは、完歩に縁がねーんだよ。別に体力や根性がないっていうわけじゃないんだけど、1年の時は100kmを歩き切ったにも関わらず、24時間を越えちまつたせいで完歩が認められなかつたっていう話だし、2年の時は風邪をこじらせたせいで不参加、そして去年なんか、途中でぎっくり腰になつちまつて、連れて帰るのが大変だつたんだから」

「なんかジョーさん、かわいがりですね」

「だろ？」の調子だと、今年は車に撥ねられて病院送りなんてこと
も…」

「えーっ、嫌です。そんなの、怖いです…」

「ちょっと、哲さん！ あたしのかわいい「コハル」を、あんまり怖がら
せないで下をこ…」

「お前とは話してねーんだよ、ケツココリ…」

「ケツ、ケツココリはあすがこひど過ぎ…」

拗ねてそっぽを向く由梨枝はさうと無視して、コハルちゃんと
話を続ける。

「でも…。だつたら、わたしが頑張つて、ジョーさんの呪いを解い
てあげたいです」

「マジかあ。泣かせるねえ、コハルちゃん」

何だかんだ言って、彼女の一番の良さはこの健気さだと、改めて
思う。由梨枝のやつに、爪の垢を煎じて飲ませてやりたいくらいだ。

「ねえ、コハル。100ハイ、絶対に完歩しようね

「うーん。でもわたし、正直に言つて、あんまり自信ないなあ

「大丈夫だつて、コハルちゃんなら。由梨枝は知らんけどな

「ちゅうとそれ、どうこいつ意味ですか？」

「だつてお前、合宿の時だつて、すぐ『『疲れたー』』って言つて座り込むじゃねーか」

「そんなことないです。100ハイは、大丈夫です」

「いいや、無理だね、絶対。お前みたいな根性なしに、完歩なんかできるわけがない」

「そんなことないもん！」

やう言つて、由梨枝が顔をムスピッとせめる。

「じゃあ哲さん、もしあたしが完歩できたら、お寿司を食べに連れて行つて下さい」

「上等だ。回転寿司どこか、回つていらない寿司屋にだつて連れて行つてやるよ」

「言つこましたね？絶対、約束ですよっ！」

「わかつたつて。その代わり、オレはお前がちゅうとでも『『もつ無理ですか』』とか『『あきらめた』』とか『『出つた瞬間に、置き去りにしていくからな。』』覚悟しておけよ」

「いいですよ。あたし、そんなこと絶対に言つこませんから」

本当にかわいくねーやつ。だが、これでいい。去年完歩できなか

つたオレには、もう後がねーんだ。

2年連続で途中リタイアとか、オレにとっては切腹レベルの大恥だからな。

とにかく今年は、足の骨を折つてでも完歩しなくちゃならぬ。そのためには、いざとなつたら、ペアを組んでいる相手を置き去りにしていく覚悟だつてできてる。

たとえ「人でなし」と言われたつて構わない。

結局100ハイなんて、マラソンと同じ。最後に信じられるのは、自分の力だけだ。

15歩目・太陽×雑草

「マークを着て、部室を出る。ローバークルー部の部室が入っている部室棟は、壁にとじこじこ見られたるビビや落書きなんかに象徴されるよひこ、築30年になる古いコンクリートの建物だ。

なんでも、3月に発生した大震災のせいで、微妙に傾いてしまったとか。ああ、おつかない。学校側も、早く立て直してくれたらいいのに。

1階に下り、自転車置き場の方に向かって、グラウンド沿いの広い通りを歩き始める。

11月の夜の空気は、2週間ほど前に開催された大学祭を境に、ぐんと冷え込みが強くなつたよつた気がする。

本番の夜も寒いんだろうな。過去2年間の経験から言つて、朝方の冷え込みは吐く息が白くなるほど厳しくなる。

よし、あとで秦ちゃんに「当田はカイロの準備を忘れないようにつてメールしてあげよう。そんな気の利いたメールを堂々と送れるのも、100ハイでペアを組む者ならではの特権だしね。

… どうか、僕。本当に秦けやんと、100ハイを歩くことになつたんだよなあ。

八王子工科大学を出発して、のどかな風景が広がる青梅周辺を歩く。

そこから甲州街道を経由して、豊かな緑が生い茂る井の頭森林公園いのかしらしんりんこうを通り、
園えんを通る。

その後は真夜中の五日市街道をひたすら西の方に進み、夜が明ける頃に多摩川を渡つて坂が多いハ王子の住宅街を通り抜けつつ、再びスタート地点に戻つてゴールになる。

今日秦ちゃんと打ち合わせをする中で改めて思つたんだけど、今回の中のコースで間違いなく、一番のクライマックスになると思われるのが、真夜中の五日市街道だ。

なにせものすごい田舎道だ。真夜中じゃ人も車もほとんど通らないだらうし、照明だつてそんなにはずだ。

足の疲労がピークに達する中、そんな真つ暗で寂しい道を、ひたすら15km、直進し続ける。

肉体的にも精神的にも辛いと思われる、この15km。

一体何人の参加者が、この難所で挫折することになるんだろう。

でも、何かが起こるとしたら、そこしかないんだろうとも思つ。

…いやいや、変な期待なんかしちゃダメだ。

僕の役目は、秦ちゃんを完歩させること。それ以上のこととは、何も起こらない。

いや、起こしてはいけない。

やつでないと、またしーちゃんの時の「一の舞」に その瞬間、門を出る直前で、ピタリと足が止まる。

…何でこのタイミング?…いや、それよりもすぐ口元を返せなあや。

…いや、でも明らかに不自然だし。…ついつか、既にめつけこっちの方を見てこるんですけど。

こうして、大げさに手を振つて僕の名前を呼ぶ彼女。

何で? あんなに後味の悪いせよなうをしたつていうのに、何でそんな風に、何事もなかつたかのように平然と僕に声をかけることができるの?

…ねえ、しーちゃん。

「やつぱつ、中井さんだ! わーい、お久し振りです」

退部を承認した部会以来だから、半年振りだらうか。

門の植え込みに座つていたしーちゃんは僕の姿を確認すると、そこからポンッと飛び降りるよつこして立ち上がつた。

ショートパンツにつけた土をポンポンと払い落しながら、じどもみたいな無邪気な笑顔で僕が近付くのを待つてゐる。

奏ちゃんも「一ノ門×2(一ノ門一ノ門)」と名付けるほどの、べすべつたくて、じつちまで笑つねやこいたくなるよつな笑顔。

彼女のこことは、そんな素敵なかわいがいを男に媚びるためだけに

使うのではなく、僕みたいに影が薄くて日の当たらない男にまで、分け隔てなく振りまいてくれるところだった。

日陰に生える雑草が太陽の光に恋い焦がれるように、僕は彼女の笑顔に魅かれていった。

15歩目・太陽×雑草（後書き）

久し振りの中井サイド。そして、トラウマになつてゐる女の子との再会。

「今、帰りますか?」

「うふ、ちゅうとね」

ようやく門を抜け、レーチャんと面葉を交わす。

半年前までストレートだった髪は、よく見たら両サイドのところだけふわりと巻かれているようだ。化粧もしているみたい。ずいぶん垢抜けたなあ。

ヤバい、なんだか緊張してきた。動搖を悟られないよう、努めて平静を装う。

「実はわざとまで、部屋で100ハイの打ち合わせをしていたんだ」

「うわーー!いいですね、100ハイ!懐かしいなあ。そっか、もうそんな時期があ。早いですね」

イタズラっぽく笑いながら、彼女が僕の肘の辺りを小突いてくる。

「それで?中井さんは、今年は誰と歩くんですか?」

「うーん。自分が昔振った男に対して、いつも態度を取るのは普通なのかな。まあ、それで」レーチャんつていつ気もしないでもないけど。

彼女は遠慮とか気まずさとか、そういうつたものは全部海の向こう

側に投げ捨ててしまつたような女の子だし。

「教えて下せじよー」と言しながらグイグイ押していくしーちゃんだけど、なんとなく教えるのが嫌だったから、素知らぬ顔ではぐらかそうとする。

それなのにしーちゃんは、一向に諦める気配がない。「むう」と口を尖らせて、パートの裾をグイグイ引っ張つて。……ああーやめてー近い、顔が近いよー？

「奏ちゃん、です…」

体と視線を逸らしながら、観念して白状する。

「わー、奏ちゃんですか。なるほどー。じつでさつときまで、顔がにやけていたわけだ」

「えつ？べ、別に、にやけてなんか…」

「いこえ、にやけてました。『壁に耳あり、門に紫穂の耳あり』です。『氣を付けましょう』

小学校の先生みたいに僕を指をして注意すると、しーちゃんは背中を丸めながら、おかしそうにケラケラ笑い出した。

それにつられて、僕も「ははっ…」と、弱々しく笑う。本当にこの子は、どうしていつもこんなに楽しそうにしていらっしゃるんだる。

一通り笑い終えてから、しーちゃんが満足したような様子で顔を

上げる。

「では、元を留めてしまつて、すみませんでした」

そう言つて、ペーリと小さくお辞儀をする。僕もそれに応えて「じゃあね」と手を振りながら自転車

置き場の方に歩き始めたんだけど、途中でふと気になつて振り返る。

「やつにえれば、しーちゃんは何でこんな所に座つてたの？誰かを待つてゐるとか？」

「えつへーあ……。やんないとひどく」

なぜか言つてくやつて答えるしーちゃん。何だろ？ 気になつたけど、特に深く考ることはせず、すばやく前を向いて歩き出すやつとする。

「あの……中井さん……」

その時、今度はしーちゃんの方に呼び止められる。振り返ると、10㍍くらこ先の方で、足を肩幅くらこに広げたしーちゃんが、緊張した様子で立つてゐる。

冷たい夜風がしみ込んだよつて、胸の奥がつーんと痛み出す。

「わたし、安心しましたー中井さん、やつぱりかと、幸せにならるべきですー」

手でメガホンを作りながら、しーちゃんが大声で叫ぶ。

「だから、じゃんじゃん恋しちゃつて下やー」

がくつ。しーちゃんつてば、それをキリが言ひかけやうわけ？

苦笑いを浮かべながら、彼女に背を向けて歩き出す。「恋しけやつて下わい」か…。まさか彼女に、そんなことを言われる日が来るなんて。

過去に一番傷つけた人が、「恋をしてもいい」と言つてくれた。

その言葉が、僕の足取りを軽くしてくれる。今なら100kmくらい、余裕で歩けてしまいそうだ。

自転車にまたがり、今歩いてきた道を逆走する。

自転車置き場が僕の帰り道とは逆方向にあるから、毎回100度手間をしなくちゃいけない。

本当に面倒くせこ。立ち止まらずスピードを上げながら、門の方をちらりと見る。

しーちゃんは、まだいるんだろうか。

…いた。でも、一人じゃない。

立ち止まらず勢のまま、ペダルをじぐ足の動きが止まる。

だんだんスピードが落ちていぐ。

そんな中、車輪が回る無機質な音だけが、チリチリと聞こえてくる。

： そうか。まだ、別れていなかつたんだ。

そんな黒い感想しか浮かんでこない頭なんか、この車輪に挟まれて、粉々に砕けてしまえばいいのに。

羨望、嫉妬、そして、後悔。

止めどなく溢れてくる負の感情の全てを自転車の推進力に変えて、僕は誰もいない学校前の広い歩道を、全速力で駆け抜けた。

かつて僕を振った女の子が今、別の男と付き合っているという事実に耐えられるほど、僕は人間ができるいない。

： しーちゃん。こんな僕が、本当にまた人を好きになつてもいいのかな？

1-6歩田・白×黒（後書き）

紫穂との再会が、中井さんの100ハイ「じどる」な影響を及ぼるか。
連載開始から1ヶ月、次回からようやく歩き始めます。

17歩目・プリン×肉まん

奥多摩には合宿で何度か来たことがあるが、相変わらず東京とは思えないほどド田舎だと思つ。

青梅線なんか無人駅がザラにあるし、そもそも東京のくせにマックが夜の21時に閉まるとか、あり得ねーよ。そんなんだから、都会の住人に「奥多摩県」なんて呼ばれるんだ。

「何、あの人たち？マジでウケるんだけど…」

おいつ、そこのブサイクな女子高生どもー。ジロジロ見てんじゃねえー。ちくしょう、バカにしやがつて。

…だが、今のオレたちの姿を見たら、注目したくなるのも無理はない。

なにせハ王子駅のど真ん中を、黄色いゼッケンとダサいジャージに身を包んだわけのわからん大集団が、そろそろ突っ切つているわけだからな。

すれ違う人たちの視線が、マジで痛い。あー、イライラする。決めた。ハ王子なんか、もう一度と行かねえ。

そんなストレスを感じながらも、ようやく駅の中を通り抜ける。すると目の前に広がったのは、高いビルの間をまっすぐに伸びる、大通りの光景。

…ああ。いよいよ、ここからが本番つてわけだ。

自分の胸が、どんどん高鳴つてくれるのがわかる。今までは歩道が狭い一本道だつたせいで、景気よく他のペアを抜き去つていいくことができなかつた。

だが、ここから先は遠慮はいらねえ。体力が残っている前半戦のうちに、なるべく多くの貯金を作つておく。

それこそが去年、あの惨めな思いと引き換えに知ることができた、オレ流の100ハイ攻略法だ。

「よしーーーそれじゃ、そろそろ飛ばして行きまーーー！」

だが、もちろんそんなわけがない。

おいおい、今日は修学旅行に来たわけじゃねーんだよ。これから
100km歩くんだぞ? わかつてんのか、あの二人（由梨枝とハ
ルちゃん）は！

「何してんすか！早く行きましょうよー。」

言ひながら、固ひざに手をついてがつゝつす。まさか、まだ駅の出口付近をうかうかしていたとは。

あーあ、スタート直前に「ハルちゃんから「やつぱり、哲さんたちの組と一緒に歩いていいですか?」って訊かれた時は、一気にテンションが上がったんだけどな。

あの2人、ショッチャウ立ち止まつては写真なんか撮りやがるし、ジョーさんはスタート直後から靴のひもが切れたとか不吉なことを言いやがるし、頼みの綱のマスオさんでさえ、地図とにらめっこしてぱっかりで、さつきから全然動かねーし。もう、みんなバラバラ。

これじゃ、ちっとも貯金なんか作れねーよ。やっぱり、5人なんて大人数で歩くのは失敗だつたか？

「哲さん、八王子駅の近くに、おいしいプリン屋さんがあるそうですよ」

「あつそう。だから何？」

由梨枝のねだるような視線を、冷たく突っぱねる。ナメやがつて、観光に来たんだつたら、1人で勝手に行つてこいや。

「そのお店、毎日のように行列ができるみたいなんですよ」

「はつ、そんなものに並んでたら、100ハイなんか終わっちまつよ」

「ですよね。あーあ、食べたかったなあ、イチゴプリン」

「何？チチゴプリン？」

「おっぱいじゃないです、イチゴです。哲さん、昼間からサイテーです」

由梨枝はブイツと顔を背けると、今度は少し後ろの方を歩いてい

る「ハルちゃんの方に駆け寄っていった。

何なんだよ、あいつ。わざわざひらひらひらひら。

ああいつやつに限つて、あとで「疲れたー、帰るー」ってグダグダ言い出すんだよな。マジでうザー。

田の前の横断歩道の信号が、点滅を始める。本音としては、ここでダツと横断歩道を駆け抜けて、少しでも時間のロスを減らしたいところなんだ。

それなのに、誰一人として急げつてこいつ気配が見られない。

仕方がないから、赤信号の前で無抵抗に立ち止まる。腕を組んで苦い顔をしながら、先に横断歩道を渡つた連中の遠ざかっていく背中を見つめる。

…確かに、100ハイは順位を競うイベントじゃない。

24時間以内に、100kmを歩き切る。その条件をクリアすれば、別に8時間でゴールしようが23時間59分でゴールしそうが、価値は同じなんだ。

それにしても、だ。

…ちよつとのんびりし過ぎなんじゃねーの、こいつら？

100ハイには毎年、ゴールまでにいくつかのチェックポイントが設けられている。

今年は全部で7つあるんだが、それらを全部通過してゴールしないと、完歩したことにはならない。

しかも厄介なことに、各チェックポイントには、制限時間というものが設けられている。

たとえば、今日走っている第1チェックポイント（1CP）の青梅市役所は、今日の20時までに通過しないと、強制的に失格になってしまつ。たとえまだ歩ける体力が残っていたとしても、だ。

まあ、さすがに1CPからこの「足切り」に引っかかる連中はまずいないだろうが、これが3CP、4CP辺りになつてみると、マジでキツくなつてくる。

オレ自身は去年、道に迷つて大幅に時間をロスしたせいで、4CPにたどり着く前に無念の足切りを食らつてしまつた。

あんな悔しい思いは、もうたくさんだ。

だから今年は前半戦で貯金を作つておきたいつて、スタート前からずつと考えていたつて言うのに！

「マスオさん。オレたち、こんなにゆっくりなペースで、本当に大丈夫なんですか？」

信号が青に変わつて歩き始めると同時に、隣を歩くマスオさんで訊ねてみる。

なにせ5人もいるのに、この中で完歩を経験しているのはマスオさんしかいねーんだ。

とにかく今は、この人の経験を頼りにするしかない。髪の方は、相変わらず頼りなさげに風に揺れているけど。

「大丈夫だつて。今のところ、けつこういいペースで歩いてる思つよ」

鼻の頭に汗を浮かべながら、マスオさんが答える。

「でも自分、前半のうちに飛ばしてある程度貯金を作つておいた方が、あとあと楽だと思つんですけど?」

「いや、それよりも一定のペースを崩さないで歩く方が、体力の消耗が少なくて済むんだよ」

「へー。そんなもんですかねえ…」

どうにも腑に落ちないとこはあつたが、2年連続で完歩していれる100ハイマスターがそういうんだ。オレとしては、黙つて従うしかない。

しばらく道なりを歩いていると、左手側にコンビニが見えてきた。その中から、ゼッケンを付けた連中がぞろぞろ出てくる。

はつ、バカな連中だ。こんな序盤からコンビニに立ち寄るなんて、時間の浪費以外の何物でもねーよ。

食べ物は事前に購入して持ち歩き、コンビニに入るのを必要最小限に止める。

それこそが、賢い100ハイの歩き方といつもんだ。ほら、スカウトの偉いおっさんたちも、いつも黙つているじゃねーか。「そなえよつねこ」つてな。

「マスオさん、ちゅうとコンビニ寄つて行つてもいいですか？」

…つて、じつせんじたよ、バカヤローが！

「おこ、てめえ。マジでいい加減にしろよ。」

振り返りながら、イライラを隠さない声で言つ。

コンビニに入ろうとした由梨枝の足が、ピタリと止まる。

自動ドアが開き、のんきな入店音が流れても、オレの怒りが挫けることはなかった。

「まだ歩き始めてから1時間も経つてねーんだぞ？こんなところでコンビニなんかに寄つて、時間が足りなくなつたらどうすんだよー。」

「でもあたし、肉まんが食べたい……」

「だから、それがナメてるつて言つてんだよー何なんだよ、せつせからプリンだ、肉まんだつて。そんなに食べ歩きがしたいんだつたら、勝手にしろー！オレは先に行くからなー！」

「待てよ、松山ー何をそんなに焦つてんだよ？」

先を急いで走るオレの肩を、マスオさんが掴んで戻す。

「大丈夫だつて、ちょっと『コンビニ』に寄るくらい。むしろ今の『つり』に寄つておかないとい、』の先田舎道に入つちゃうから、なかなか寄れなくなると思うぞ？」

「知りませんよ、そんなの。オレはちゃんと、食い物買つてあるんで」

「でも、由梨枝が寄りたつて言つてるんだから。いいか、松山。オレたちは3人で1つのチームなんだ。自分勝手なことはあまり言うな」

「何だとー? 一番自分勝手なことを言つてんのは、由梨枝じやねーか!」

「やう言いたくなる気持ちを、寸でのところで堪える。

「いいよ。入るつ、由梨枝」

「なんか…。すみません。すぐ』に買つときます」

しゅんとした声で言つてから、由梨枝が駆け足で『コンビニ』の中に入つて行く。

「いいか、絶対に1人で先に行くんじゃないぞー!」

ふて腐れるオレにそう言つて念を押してから、マスオさんも由梨枝のあとに続いて、店内に入つて行つた。

ちくしょう、面白くねえ。マスオさんが甘やかしたりするから、

由梨枝のやつが余計につけあがるんだ。

あのガキ、100ハイをピクニックか何かと勘違いしていやがる。あーあ、マジでやつてらんねえ。舌打ちしてから、『三箱の前にどつかり座つてあぐらをかく。

「あの…。あんまり由梨枝を、怒らないでやつて下せー」

申し訳なさそうな声で、『ハルちゃんが言つ。何だよ、これじゃまるで、オレが悪者みたいじゃねーか。

黙つたままふと先の方を見ると、ジヨーさんが彼女を呼んでいる姿が見えた。どうやらこの2人とも、『』でお別れのようだ。

「では、ジヨーさんが呼んでますので」

やつ言つて、『ハルちゃんがジヨーさんのあとを追いかけて行く。

その後も1組、2組と、あのダサいゼッケンをつけた連中が、当てつけのようにしてオレの田の前を通過して行く。

あー、マジでムカつぐ。こんなもんじゃねーんだよ、オレが思って描いていた100ハイは！

17歩目・プリン×肉まん(後書き)

いよいよ歩き始めました。現在はスタート地点の八王子工科大学を出発し、1CPの青梅市役所に向かって、八王子駅周辺でケンカしているところです。

1-8歩田・出遅れ×焦り

トンネルを抜けて階段を上ると、でかいトラックがビュンビュン走り抜ける国道16号線に入った。

近くに八王子インターがあるせいか、ガソリンスタンドと車屋がやたら多い。

とにかく空気が悪くてうるさい道だが、右手を走る車以上にいるのが、オレの少し後ろを歩く由梨枝だった。

「マスオさん。司たちは今、多摩川を渡ってるんですって」

司との長電話を終えて、由梨枝がマスオさんに訊ねる。「同期の様子が知りたい」と言って、由梨枝はさつきから手当たり次第、電話をかけまくっていた。

ただでさえ不快な車の排気ガスと騒音に加えて、由梨枝の無駄に高いキーキーした声が、マジで耳障りだ。

「コハルちゃんと別れたら、少しは落ち着くだろうと思つていたのに。テンションだけで完歩できると思つていたら、大間違いだつーの。

そんな由梨枝を、オレは完全に無視することに決め込んでいた。

「「」からだと、多摩川までどれくらいかかるんですか？」

「そうだな…。たぶん、あと15分くらいじゃないかな？」

「15分かー。駅から学校までと、だいたい同じくらいの距離ですね」

「確かに。けつこう離されちまつたな」

「あたし、全然走れますけど?」

「いや、大丈夫だよ。オレたちは、オレたちのペースで歩けばいいや」

「ですよね。そうだ、悠馬はどうしてるんだひつ、確か、咲恋さんと一緒にペアでしたよね?」

「あのバカップルか。あいつら、八王子駅で迷子になつてたりして」

「いやいや、あのバカのことですから、きっと間違えて東京23区の地図を持つて、今頃慌てるんじゃないですか?」

「そう言つてケラケラ笑う由梨枝だが、オレから言わせれば、お前も悠馬も大して変わんねーよ。」

面白い物を見つけるたびに、写真を撮るために立ち止まる。それで一体、どんだけの時間と体力をロスしていると思つていやがるんだ、こいつ?」

そんなフラストレーションを抱えつつ、排気ガスを連想させる灰色のイメージがぴつたりな環状線沿いを歩き続ける。

とにかく、都心にあるようなきらびやかな光景が何一つありやしない

ない。去年は23区をぐるっと一周するコースだったから、もう少し楽しかったんだけどな。

更に叢える」と、八王子バイパスを越えた辺りから、だんだん縁が目立ち始める。さあ、いよいよ奥多摩県つて感じだな。車と木しかない退屈な景色の中、緩やかに続く坂道をしばらく登つて行く。

ここに来て由梨枝も、ようやく落ち着いて歩くようになつてきた。広い歩道を3人で並んで歩きながら、他愛のない話で盛り上がる。

そのうち清掃工場の長い煙突を越え、多摩川にかかる大きな橋を渡つて、オレたちは昭島市に入った。

「哲ちゃんって、高校時代は陸上部でしたよね？」

橋を渡つてしまひく歩いたところで、由梨枝が訊ねる。

「好きな陸上選手とかいないんですか？」

「わうだな…。やっぱり、モーリス・サトゥンだな

「誰ですか、それ？」

「お前、モーリス・サトゥンも知らねーのかよ

「北京オリンピック男子マラソンの金メダリストだよ

マスオさんに教えてもらひと、「へー、すこいですね」と、由梨枝が感心した風に頷く。

「まあ、素人にはわからんねーだろうナビ。あいつの本当のすゝみを
なんて」

「哲さん。その人、来年のオリンピックにも出るんですか?」

「出ねーよ。死んじまつたからな」

「えつ、死んじやつたんですか!…?」

由梨枝が驚きの声を上げる。

「何ですか?」

「事故だよ、事故。故郷のケニアで、車に撥ねられたんだぞ」

「えーっ、そんな…」

「でも、生きていたとしても、次のオリンピックは厳しかったかも
知れないな」

マスオさんが思案げに言う。

「いろんな噂があったよな?北京で金メダルを獲つてから、ハング
リー精神がなくなつたとか、不倫に溺れるようになつたとか」

「結局あいつも、その程度の男だつたつてわけですよ」

頭の後ろで手を組みながら、醒めた口調で言う。

マスオさんの言う通り、サトウンはオリンピックが終わった翌年

の世界陸上で優勝したのを最後に、表舞台からすっかり姿を消してしまった。

傲慢な態度、「コーチとの確執、そして不倫。いろんな噂が流れた。

そのうち、噂さえ流れなくなつた。

ぶつっちゃけ、オレもこの間のニュースを観るまでは、サトウンのソニアが、ことなんかすっかり忘れちまつていたんだ。

だが、あいつの全盛期の走りを映す映像を観るたびに、過去の黒い噂を信じたくないと思つ自分がいることに気が付かされる。

「モーリス・サトウンか。何だろ? 気になるなあ…」

由梨枝がぶつぶつ独り言を言つてゐるところに、「とつておきのショートカットがある」と言つて、マスオさんが脇道の方に入つて行つた。

付いて行くと、なるほど確かに、1ミリたりとも曲がつていなくて細くてまつすぐな道が、ずっと先の方まで伸びてゐる。

よし、これで少しは遅れが取り戻せそうだ。日が暮れて、足に軽い痛みを覚え始める時間帯になつてきだが、オレは意気揚々とその道を歩き始めた。

ところが、この道がとにかく長げんだよ。線路沿いを歩いているんだが、駅を3つも越えたのに、まだ第1チェックポイントに着かねーんだもん。

ショートカットって言つから、てっきり目的地までひとつ飛びつていう感じだと思っていたんだけどな。

辺りは照明が少なく真っ暗で、話のネタにならそうなものも何一つない。会話もめつきり少なくなってしまった。

2人の表情からは、最初の疲労のピークを迎えていたことが、ありありと見て取れる。

まだ4時間、20キロも歩いてねーのに。こんな調子で、本当に完歩なんかできるのかよ？

俯き加減に歩きながら、途中リタイアした去年の嫌な記憶が、頭の中を過つていぐ。

目的地が全然見えてこない中、焦りと疲労と苛立ちばかりが募つていぐ。

「えつ、もう一休を出たのー？」

河辺駅前の交差点を渡つたといひで、由梨枝がぶつ飛んだ声を上げる。

「マスオさん、同たちの組は、もう一休を出せやつたみたいですよ？」

電話を切つてから、由梨枝が不安げな様子で訊ねる。

「…大丈夫だつて。オレたちも、あと10分ぐらいで着くから」

地図を確認してから、マスオさんが面倒くさそうに言う。

「10分つて！マスオさん、さつきからやつ言って、全然当たつた試しがないじゃないですか！」

「はあ？ そんなことさ…」

あー、疲れたー、足痛いー、早く休みたー

「アガキアガニアはんたよ！ 黒で参！」

もう我慢できなかつた。振り向きざまに、不愉快な文句を垂れ流す由梨枝を怒鳴りつける。

そもそも、金儲けにこだわるのをいじめねーか。

ただでさえ歩くスピードが遅いへせこ、コンビニに立ち寄つたり、写真なんか撮つたり。

オレは今年足を潰しても完歩する」ついでに覚悟で挑んでいるんだ。

それなのに、何でこんなやつらが口を引つ張られるのかやいにねーん
だよー

「…ごめんなさい」

いつものようにケンカになると思つたのに、めずらしくちゃんとした様子で由梨枝が謝つてくる。

それでも、その後の空気はマジで最悪だった。

実際にマスオさんの読みはましても外れて、10分経つても田印であるファミレスの看板さえ見えてこない。

それでも、今のオレたちに文句を言つ元気なんかあるわけねーし、そもそも次に文句が飛び出したら、今度こそチームがバラバラになつてしまふ。そんな危機感さえ漂つていた。

「やつたー！やつと着いた！」

50メートルほど先の方に黄色いのぼりを見つけて、由梨枝が歓声を上げる。第1チェックポイントを示すのぼりだ。時間は、18時を少し回ったところだった。

「やあ、キミたち。あそここのテントが、受付だからね」

市役所の入り口で、スカウトの制服を着たメガネのおっさんに声をかけられる。ん？このハスキーボイス、どこかで…？

「あれ？あんた、確か…」

「ああ、キミ。確かに、豚の丸焼きの時に会つたっけ？」

やつぱり、夏田さんだ。自称プロのボイスカウトで、その正体は単なる一ートという、どうしようもない大人。

「何してんすか？こんな所で」

「もちろん、100ハイのスタッフとして働いてるのを」

「一ートが働いているつていうのも変な話だがな。由梨枝とマスオさんが休憩所に入つて休んでいる間、オレは暇つぶしに夏田さんと話し込むことにした。

「今年のベース、けっこつキレイでしょ？オレが考えたんだよ、実行委員会の副委員長だから」

でも、一ートなんだろ？全く、そんなことをしている暇があつたら、就活しろと言いたい。本当にこいつ、一体何がしたいんだか。

「常盤松大口ーバーの連中には、何人か会いましたか？」

ペットボトルのスポーツドリを一口飲んでから、夏田さんに訊ねる。

「うーん、全員の顔を知ってるわけじゃないから、何とも言えないけど…。ああ、そう言えば、森野さんには会つたよ

「えつ、咲恋さんですか！？」

思わず驚き過ぎちまつた。だが、あり得ねーよ。絶対におかしいつて。

だつて、咲恋さんと悠馬のペアだぜ？100ハイ史上、最凶のバカップルとまで言われたあの二人だぜ？どうなつてんだよ？ていうかオレたち、その2人にさえ、現時点で負けているつてことかよ。

「あとねー、あの二人。ほら、キリと一緒に、豚の丸焼きに来てく
れた…」

「中井と火星じ…。いや、青木ですか？」

「やつやつ。その2人は、森野さんたちよつも更に早く、ここを通
過して行つたよ」

「えつ？それつて…」

訊きながら、脇の辺りに嫌な汗がにじみ始める。

「ちなみに、どれくらい前にこのになるんですか？」

「やつだなあ。もつ、1時間以上前になるんじゃないかな」

「こつ、1時間以上も…？」

やつぱり、オレたち3人は、かなりヤバい位置にいるらしい。

何度も言つよう、100ハイは順位を競い合つイベントじやない。
い。

だが、まだ1つだつてこのに、同じ部活の組に、1時間以上
も差を付けられちまうなんて。

焦るなと言つ方が、無理な話だ。

「マスオさん…すぐに出発しましょう」

休憩所に入つてマスオさんの姿を見つけた瞬間、飛びつくよう
して声をかける。

「ああ。オレもさつきペースを計算し直して、このままじやちゅつとヤバいんじやないかって思えてきた」

「だから言つたぢやないですか！おいつ、由梨枝！いつまでボケーつとしてんだ！早く靴下を履け！」

「あつ、せこい。」

全く、靴下を取り替えて足の蒸れを防ぐこと自体は別に構わねーが、どんだけ時間をかけてんだよ。

遅い。
何もかもが遅い。

靴を履く由梨枝をイライラしながら待つてから、オレたちはすぐ
に1CPを出発し、青梅街道に入った。

「…由梨枝？なんか、足引きずつてないか？」

「いえ、そんなことないです」

「どうか？痛くなつたら、すぐ」言えよ

街路樹が並ぶ青梅街道の歩道を、オレたちは早歩きと書いていいくらいのペースで歩いていた。いや、むしろこれくらいのペースが普通なんだよ。今までが、遅過ぎただけだ。

「それより…。大丈夫ですか、時間？」

「まあ、このペースで歩き続ければなんとかなるだろ?」

「『1』みんなさい。あたしが遅いせいで…」

全くだぜ。申し訳なさそうな声で言つ由梨枝だが、いつまでこのハイペースに耐えられるか。オレたちよりも一メートルほど後ろの方を、やつとの思いで付いて来ているという感じだ。

まあ、最初から言つておいた通り、オレはいざとなつたら、由梨枝なんか置いていくつもりでいるけどな。

「そういうえば、ハルさんたちは応援に来てくれないんですかね？ てっきり、1CPで待つてくれてるかと思つてたのに」

「ああ。それなら、やつをハルさんに電話をして訊いてみたんだけど、そうしたら航大さんが『青梅は遠いから、2・5CPからで充分だ』って言い張るもんだから、2CPまでは応援に行けないんだつて」

「えーつ、そんなあ。寂しいなあ」

「まあ、ドライバーがあの航大さんじやね。本当にわがままなんだから、あの人」

あきれた口調でマスオさんは言つたが、あの人のことだ。きっと1CPや2CPでリタイアするようなバカはいないと踏んで、効率よく応援に回る方法を考えたんだろう。

しかしですね、航大さん。オレたちはこのままだと、2CPでリタイアするようなバカになつちまうかも知れませんよ…

険しい表情で歩く由梨枝の様子をちらちら見ながら、オレはそん

な懸念さえ、抱き始めていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6115y/>

テク×2（テクテク）

2011年12月25日14時53分発行